View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

隣人体験
秋季宗教運動・大学キリスト教週間への招き

辻　　学

最初に「外国人」として生活したのは14年前、留学生としてスイスに滞在したときだった。日本とは違う環境で暮らすのは、もちろん楽しいことも多いのだが、いつもある種の不安につきまとわれている感じがしたのも事実である。

言葉のことはもちろんだが、ちゃんと滞在許可がもらえるのか、適切な住居が見つかるか、病気になったらどの医者に行けば良いのか、というような細々とした不安が外国生活にはつきまとう。自分のように、いつかは帰国するという前提で滞在している場合ですらそうなのだから、仕事を見つけ、その土地に根づいて生活しようとする外国人であれば、その不安はどれほどだろうか。外国人であるゆえにアパートの賃借を断られたとか、学校や仕事で差別をされたというニュースに接すると、その弱い立場を多少なりとも経験しただけに、腹立たしい思いがする。

そのような不安にもかかわらず、自分が外国生活に良い印象を抱いて帰国できたのは、親身になって自分のことを心配し、助けてくれた人たちがいたからだった。その人たちから受けた「隣人愛」のおかげで私は、貧乏留学生の生活を最後まで続けることができたのである。

ルカ福音書10章にある「良きサマリヤ人の譬え」には、強盗に襲われて重傷を負った（おそらくユダヤ人の）旅人を助け、手厚く看護するサマリヤ人が描かれている。このサマリヤ人は、旅人が「外国人」、しかも歴史的に対立しているユダヤ人だということなど意に介さず、倒れているその姿を見て「断腸の想いに駆られ」（岩波訳。新共同訳は違う訳になっている）、身銭を切って助けるのである。危機に瀕した時に、思わぬ「隣人」を得たこの旅人がどれだけ嬉しかったか、私にはわかるような気がする。

私たちの身の回りにも、文化や民族を異にする人々が多く生活している。はたして私たちにはその人々の「隣人」になる備えがあるだろうか。日本の「国際性」は私たちの振舞いにかかっている。

今回の秋季宗教運動・大学キリスト教週間の主題は「隣人」である。「あなたも行って同じようにしなさい」（ルカ10章37節）というイエスの言葉に私たちはどう応えたらよいだろうか。共に考える機会としたい。

（商学部宗教主事）